別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　千葉雅也

千葉雅也氏の博士学位請求論文『ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』は、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの哲学を対象とした研究であるが、ドゥルーズが精神分析家フェリックス・ガタリとともに創造し展開した〈生成変化〉devenir という動的な概念をドゥルーズ哲学そのものへと折り返すことを通じて、その哲学の核心部分を批判的に分析し解釈しようとするきわめて野心的な労作である。

従来、ドゥルーズ哲学における〈生成変化〉論は、ベルクソン哲学からの展開として理解されることが主流であったが、千葉氏は、ドゥルーズの最初期のヒューム論を手がかりにして、世界を原子的なものの連合とみなすヒューム哲学の基本構想が、その後のドゥルーズ哲学の形成・生成の全体に実は深く関与しつづけているという立場から、ベルクソン哲学に特徴的な連続的なホーリズムの世界観を土台にしたドゥルーズ哲学ないしその理解を、主体化あるいは個体化の方向へ脱構築することを目指している。それは、一方では、アラン・バディウらによるドゥルーズ哲学の「存在論的ファシズム」批判からドゥルーズ哲学を救い出す試みであると同時に、他方では、とりわけ存在のセクシャリティにかかわるドゥルーズ哲学の内的な限界をもえぐり出す批判的試みでもある。

この二重の批判作業を遂行するために、本論文は、かなり複雑な構成を採用している。本文173 頁に及ぶこの論文は、主題と方法さらに方向と構成を指示する序論のあとに、４章構成からなる第一部「外在性の平面」、同様に４章構成からなる第二部「個体化の要請」からなり、そのあとに結論が続いている。

第一部は、ドゥルーズ哲学の基本的な構成を「外在性」というヒュームそして英米文学を経由する関係概念によって哲学史的に位置づける試みといえる。この試みは『千のプラトー』第十プラトーの分析から出発して、ドゥルーズにおけるスピノザ主義、カント主義、ヒューム主義を分析しつつ、ベルクソン主義に収斂するような全体主義を「キャンセル」して、あくまで外在的に「関係束」を措定する「諸部分を全体化しない全体」という軸にそって、ドゥルーズ哲学を「共立性」(consistance) の哲学として、また〈生成変化〉をこの「共立性」が組み変わることとして再定義するにいたる。フランスの現代哲学の文脈におけるいわゆる「ポスト構造主義」から「ポスト・ポスト構造主義」への転回を踏まえたこの独創的な解釈から出発して、本論文は、さらに哲学固有の文脈を、

その隣接領域である精神分析の理論との対決を通じて、脱構築し、哲学の言説そのものを表象文化論的に批判するテクスト読解を行っている。

第二部は、第一部で導出された外在的な共立性からとりわけ個体化に向かう〈生成変化〉のさまざまな事例をドゥルーズ哲学の内部において実証的に確認している作業である。『差異と反復』から『意味の論理学』、『マゾッホ紹介』、『千のプラトー』などドゥルーズ哲学の主著とも言うべき著作群を追いながら、それぞれのイロニーとユーモア、尿道的なものと肛門的なもの、マゾヒズムとサディズムといった二項対立を折り返す「襞」の出来事の論理を注意深く摘出することを通じて、ドゥルーズが定位した〈生成変化〉が究極的に「待ち伏せる存在」である動物への〈生成変化〉として了解されうることが明らかにされている。本論文は、ドゥルーズ哲学のコーパス群のなかに、他者への〈生成変化〉が個体化の要請と重なり合う「襞」状の折れ線を探り出し、かつそれを描き出すそれ自体ドゥルーズ的とも呼びうる解釈作業を遂行していることになる。

このように単なる哲学研究の枠を超えて、現代文化のもっとも論争的な問題系のいくつかに踏み込みながら、ドゥルーズ哲学の新しい像を大胆に描ききった本論文であるが、仏語文献にとどまらず英語文献日本語文献も広範に渉猟されており、先行研究に対するみずからの批判的関係をあらゆる箇所で明確にしている。また日本におけるドゥルーズ哲学の受容に関しても批判的読解の成果を随所に示している。

審査においては、本論文でアクセントを奪われた形になったドゥルーズにおけるベルクソン主義とその相関物としてのイマージュの問題を復権する余地が残っていないか、また『差異と反復』の読解において「反復」の問題系がもっと深められるべきではないか、などの指摘がなされたが、それらはいずれも、本論文が提示した解釈が今回扱われなかった問題系へとさらに拡張されることが望ましいという審査員の積極的な肯定の表現として考えられるものであった。本論文が、哲学研究と批評作業の融合という独創的な領域において大きな学術的成果を挙げたことについて審査員全員の意見が一致した。

以上により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。